

【滋賀県教育委員会教育長賞】

「戦争で奪われるもの」

米原市立大東中学校2年 塚口 春香

私の祖父は、一九四六年二月に旧満州（今の中国）で生まれました。日本が戦争に負けて、それまで中国で暮らしていた多くの日本人は住む場所を追われ、大変な思いをして日本に帰ってきたそうです。

無事に日本に帰国出来た人も、中国に来る前に家や土地を処分してしまっていたので暮らす場所もなく、とても苦勞したと聞きます。祖父達も故郷の長野県に戻ってきても畳四畳に七人で生活し、食べ物を親戚に分けてもらっていて、いつもお腹をすかせていたと話してくれました。それでも私の祖父は日本に帰ってこられてよかったです。もし祖父が中国残留孤児になっていたら、私の母も生まれていないし、私もいなかったことになるので不思議な感じがします。

どうしてこんなことを思ったかという、ロシアがウクライナに侵攻してから一年以上たった今も、まだ戦争が続いているからです。攻撃を受けた街は、人が住めなくなっていて皆外国に避難したり、兵士は命を落としたり捕虜として連行されたり、家族とも離れ離れになったりしています。その経験は心身共に一生残り続ける深い傷になってしまうと思います。

誰かが亡くなったということは、本当はその後の命が受け継がれていくはずだったのに、未来の命さえも奪われたということの意味します。国と国との争いで犠牲になるのは、いつも一般の人達です。人は幸せに生きる権利を持っているのに、このような身勝手な戦争によって人々の生活がおびやかされていることが私には理解できません。

ウクライナから日本に避難してきた子供へインタビューしているニュースを見たことがあります。「将来の夢は何ですか？」と聞かれ「明日があるかも分からないのに、そんなの決められない。」と答えていたことに私は衝撃を受けました。平和な日本に避難してきても、将来を考える余裕がないくらい、その子の中では戦争が影を落としているのだと思いました。日本ではよく聞かれる質問ですが、それに素直に答えられるのは平和だからなんだと改めて思いました。今私

が当たり前のように学校に通い、部活や勉強を頑張ったり、友達と遊んだり、家があって家族がいてという生活は、時代や国が違えば何ひとつなかったかも知れないと考えると、恐ろしいです。

先日、もし戦争になったらどう行動するか、という内容のテレビ討論を見ていた時、それぞれ皆「自分だったら……。」という意見を述べる中で、誰かが「実際始まったら、選択肢はないですよ。」と言った一言にハッとしました。今は言論の自由が保障されて個人個人の意見も尊重される時代ですが、日本にも“お国のため”というだけで全てに我慢を強いられ、批判的なことを口にすれば”非国民”とされ、自分はこうしたいという選択肢は許されなかった時代があったからです。そんな時代は経験したくありません。

国全体が同じ思想でないといけない雰囲気は、とても怖いことだと思います。それが間違った方向に向いても誰も止められないからです。ロシアとウクライナの戦争からそんなことを思いました。

戦争は人権を踏みにじるものです。相手の意見や個性を認め、尊重しあい、仲よくやっていけば、戦争は起こるはずはありません。一般市民を巻き込むこの戦争を早く終わらせてほしいです。そしてウクライナに限らず、戦争が続く国の子供達が、当たり前のように将来に希望を持てる世界になってほしいと心から願います。

戦争という最大の人権侵害を、これ以上引き起こさない為に出来ることがあるのか考えました。まずは自分の意見を思った通りに言えること、それと同じくらい周りの意見も聞き入れられることが、一人一人の人権を認め、相手の存在を認めるための大切な第一歩であると思います。